

「涙の拭かれる日」(ヨハネの黙示録二一章一〜七節)

1 見えないもの

ヨハネの黙示録が講壇で取り上げられることはそう多くはありません。あるいは限られた箇所しか取り上げられないというべきでしょうか。今年は今日始めて取り上げられています。

聖書はよくできていて創世記からはじまって黙示録で終わっている。世界の始まりを語って世界の終わりを語る。神様によってこの世界ははじまり、神様によってこの世界は終わる。人間の生活はそのあいだで営まれています。今日の聖書箇所は「玉座」という言葉が二度出てきます(三、五節)。神の王としての支配を指しています。この支配をはずれたところで何も起こらないし、何も存在しない。それが聖書そのものの発しているメッセージです。

創世記が世界の始まりを語っているように、ヨハネの黙示録は世界の終わりを語っています。それはヨハネが想像をたくましくして書いているではありません。彼がイエス・キリストの証しとして受けたものです。そのようなものとして彼自身が聞きかつ見たものです。

世界の終わりについて語っていると申しました。一言でいうと終末の審判と新しい天と地が描かれています。ただそれは、世界はこうやって終わるとか、どんな天変地異があるかとか、予兆は何かというようなことが記されているというのではありませぬ。終末に至る日程表を示すのが黙示録ではありません。そうではなくて世の終わりについてたしかに語りながら、諸教会が、諸教会の信仰者たちが、それによって不安をいだく、何か浮き足立ってしまう、反対に元気をなくしてしまう、信仰なんかそっちのけになってしまう、むしろそういうことがないように、そうした中でも信仰に固く立って、忍耐して、最後の日を待ち望みながら歩みつづけるように勇気づけ励ましているのです。

そもそも「黙示」という言葉は隠れているものを明るみに出す、覆(おお)いを取るという意味をもっています。

この文書ができたのは紀元一世紀の終わり、ローマによるキリスト教迫害が激しくなったときです。その少し前には皇帝ネロが現れ、ローマ大火の犯人をキリスト教徒になすりつけ(じっさいはネロが放火した)、それを機にキリスト教徒を捕縛・殺害したのです。ペトロやパウロが殉教したのはその時だといわれています。その後皇帝礼拝がおこなわれるようになり、それに従わないキリスト教徒はいっそう激しい迫害を受けていきます。

当時の一部のキリスト教徒がカタコンベといわれる地下墓所に逃げ込んだことなどご存知の方も多と思います。ローマ市内のきわめて広い範囲にわたり、地下一〇メートルぐらいのところにもわたって死体置き場がつくられておりました。迫害を逃れてキリスト教徒がそこに逃げ込んだ。官憲はそこにいることは分かっていますが

地下は悪霊の世界ということで容易に踏み込まなかったといわれます。キリスト教徒がそこに入り込むことができたのは、悪霊なるものはすでに克服されていることを知っていたからです。

迫害が激しくなる中で、キリスト教徒の目に、ローマという国家は黙示録の言葉を使えば竜のような、「年を経た蛇」(一二・九)のような、海から上ってくる「一匹の獣」(一三・一)、怪物として映ったのです。そうした現実の中でヨハネはしかし、もう一つの現実を見るのです。見えない現実を見るのです。人の目に隠されている将来を見るのです。将来を隠している覆いをとって私どもに見せてくれるのです。それは何か。悪魔の敗北、神の勝利です。ヨハネはローマをバビロンになぞらえて大淫婦バビロンは滅んだとして語ります(一八章)。ヨハネは、神はすでに勝利した、「事は成就した」(二一・六)と、その現実を証ししたのです。

2 聖なる都

さて今日の聖書箇所が示しているのも、このもう一つの現実、覆いがとられた将来の真実のすがたです。

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整え、神のもとを離れ、天から下ってくるのを見た(一〜二節)。

ここから私どもが第一に聞くのは、「最初のもものは過ぎ去った」(四節)ということではないでしょうか。

この最初のものには、私どものこの世における生活も入っています。人としての生活だけではない、キリスト者としての生活も入っています。自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい(マタイ一六・二四)、自分の十字架を担ってわたしに従わない者はわたしにふさわしくない(一〇・三八)、こうしたイエスの言葉にしたがって歩んでいる私どもの生活です。私どもはみな自分の十字架を背負っています。だれもがそうです。イエス・キリストに従うということは、そうした自分の十字架を引き受ける、背負っていくことを意味します。むろんそこには生きる喜びもあります。神に生かされた喜びもあります。しかし労苦もあります。キリストに従うゆえの労苦もあります。イエス・キリストと一緒に担ってくださいならなければならぬことのできない労苦があります。しかしそれがどのようなものであっても、最初のもものは過ぎ去った。この世のものは過ぎ去る。それゆえこういわれます。「彼らの目の涙をことごとく拭いとってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである」(四節)。

二番目にここから私どもが聞くのは、新しいものが現れたということです。「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た」とある通りです。しかしその新しい地は何も

ない砂漠のようなどころではありません。「都^{ポリス}」があるのです。聖なる都です。都というこの言葉は、町、都市、あるいは国家を意味します。政治的な秩序をもった共同体です。それが、神を出どころとして、地に下ってきたのです。

この章の終わりに（今日の聖書朗読には入れませんでした）、この都について少し詳しく書いてあります。

わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。・・・都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れ（二二〜二七節）。

都を治めているのは神ご自身です。「神の幕屋が人の間にあって」（三節）、つまりその都は神の幕屋、神のおられるところですから、神殿（教会）はそこにはありません。都が聖所です。

ここに住む者たちは神の民です。この都の門は一日中閉ざされない。そして諸国の民に開かれています。しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はこの都の市民となることはできない。この新しい都には、「子羊の命の書に名が書いてある者だけ」（二一・二七）が入れるのです。これがヨハネの見た新しい地、聖なる都、新しいエルサレムです。

3 合点のゆく日

この聖なる都の市民として、神の民として神と共に住まう、これがヨハネの見た私どもの将来、いまは隠されている現実です。

ところで世の終わり、最後の審判、永遠の救いということで、私が決まって思い出すのがドストエフキーの名作『罪と罰』に出てくるマルメラードフという人物のことです。

『罪と罰』という小説、一人の青年、名前はラスコーリニコフ。彼が金持ちの老女を殺害、目撃され、老女の義理の妹も殺してしまいます。罪意識にさいなまれ、殺人の疑いをかけられながらも、何とか追求を逃れています。しかしソーニヤという清らかなところをもつて家族のために犠牲となって働く娼婦に出会い、罪を認めて、自首します。シベリア送りになりますが、ソーニヤもそこにやってきます。ラスコーリニコフが罪を悔いて人間性をとりもどしていく物語です。随所に聖書のこと信仰のことが出てきます。

このソーニヤの父親がマルメラードフです。毎日酒を飲んでくたをまいてるような人物です。そのために失業し、妻の服を質に入れ、娘のソーニヤを街角に立たせ、

その金でまた飲んでしまうような人間です。彼は、酒場で、ラスコーリニコフに、自分の転落人生を語ります。どうあがいても泥沼から這い上がる望みはないのだと自虐的に語って聞かせるのです（トロワイヤ『ドストエフスキー伝』参照）。

その彼がこう言います、「だがあらゆる人間を憐れみ、あらゆる人間を理解してくださる神様だけは、われわれを憐れんでくださるに違いない」。そして神の裁きの場面をこんなふうに語ります。裁きは神様がひとりでなさる。全員が終わったら、ようやく神様はこう訊ねてくださるだろう。さあそこにいるお前たち、酔っ払いもやくざもこつちに来なさい！　そこでわれわれが図々しくも出て行くと、神様はこうおっしゃるに違いない。なんじ豚ども、そなたたちは獣のような面をしておるが、それでもいいからこつちに来なさい！　すると智者や賢者が大声でぶつぶつ神様に文句を言います、神様、なにゆえ彼らをお迎えになさるのですか。すると、こうおっしゃるだろう。「わしが彼らを迎えるのも、それは彼らの中のひとりとして、自らそれに値すると思っておらぬからだよ・・・」。こういつて神様は、われわれに手を伸ばされる。そこでわれわれは御手に口づけして　泣き出す、そして何もかも合点が行くのだ。その時何もかも、誰も彼も合点が行くのだ・・・（新潮文庫）。

かくて作者のドストエフスキーはマルメラードフを神の都に招き入れられた人として描いています。なるほど智者や賢者が大声でぶつぶつ文句を言います。しかし神は彼を救ってください。神はすべての人を招かれます。イエス・キリストにおいてすべての者が救いにあずかる、イエス・キリストの恵みの外にいないなければならない人はだれもないということですよ。

マルメラードフは審判の日を、救いの日を、つまり終わりの日のことを「合点の行く日」と言っています。「何もかも合点が行くのだ。その時何もかも、誰も彼も合点が行くのだ」。

じつさい私どもの人生から、なぜという問いが消えてしまうことはありません。思いがけないこと、望んでもいないことが起こります。この世では悪が栄えるように見えます。いろいろの矛盾に希望もすぐに絶望に変わってしまう。合点がいかない。それが私どものこの世であり、この世の生活です。問いをかかえながら私どもは生きることになります。この小説家は古いものが過ぎ去ってすべてが新しくされてはじめてすべてに合点が行くと言っています。

そうしたことはふだん生活でも私どもが経験することです。その振り返りの最終地点が終わりの日です。そうだったのか、神様はそう考えておられたのか、そうして合点が行く。

それまで私どもはなぜという問いをもちつつづけます。分からないことだらけです。でもかの日には合点が行くのです。涙が拭い去られるのです。それゆえ希望の忍耐を失わないで歩んでまいりましょう。

（二〇一八年一月二五日）